

とよ だ さ きち

# 豊田佐吉



豊田佐吉 (1867 ~ 1930)

出典 : 『豊田佐吉伝』

糸繰返機(1895年特許)を開発、販売を開始。糸繰返機は順調に売れて経済的基盤を確立し、動力を使った豊田式汽力織機(1898年特許)を開発、その販売のために三井物産と井桁商会を設立した。その後、不況のため力織機の注文が激減したが、豊田商店を豊田商会に改称し再起を図った。1903年、糸切れを自動検知したり、緯糸を自動的に交換する初めての自動織機(T型)を発明、日本人として自動織機に関する最初の特許を取得した。

## ■中国、上海への事業展開

豊田商会が順調に発展したのを見た三井物産は、資本家から資金を調達し、1906年に豊田式織機(株)(社長は谷口房蔵)を設立、佐吉は常務取締役となった。しかし、日露戦争後の不況の影響で会社は赤字を出し、多額の研究費を使う自動織機の開発は無用とされ、1910年、佐吉は豊田式織機を去ることになった。失意の佐吉であったが、三井物産の藤野龜之助の誘いで欧米視察に行き、自分の発明が欧米に劣るものではないと自信を取り戻した。1911年1月帰国して、資金集めに奔走し、同年10月、名古屋市西区栄生町に自動織機開発のための自動織布工場(1918年に豊田紡織(株)、現・トヨタ産業技術記念館)を設立した。経営が軌道に乗ると、1921年にかねてからの思いである民間外交の実践と開発資金確保のために、中国の上海に豊田紡織廠を設立した。この時、海外進出に反対する親族に対して言った言葉がタイトルの「障子を開けてみよ、外は広いぞ」である。

## ■英国プラット社が世界一と認めた自動織機G型

佐吉の自動織機に関する特許は、1903年から中国進出の1921年までの間に26件もの特許を取得していたが、実用となる自動織機はなお開発途上であった。佐吉は経営を利三郎や西川秋次に任せ、息子の喜一郎や部下たちとともに何度も発明と改良を加えて、1924年、57歳の時に自働杼換装置(二次式)を発明(特許第65156号)、集大成と言える「無停止杼換式豊田自動織機(G型)」を完成させた。後の1929年、自動織機G型をみた英國プラット社の視察員は、マジック・ルーム(魔法の織機)と感嘆したと言う。同年12月、プラット社との自動織機特許の権利譲渡に関する「豊田プラット契約」が成立、この契約金は、その後の豊田の自動車事業進出への資金の一部となつた。

1926年に自動織機を製造、販売する会社として豊田自動織機製作所を設立した。1933年、豊田自動織機製作所は自動車の製造を社業に加えることを決議、息子の喜一郎が自動車部門を立ち上げ、現在のトヨタ自動車の礎となつた。

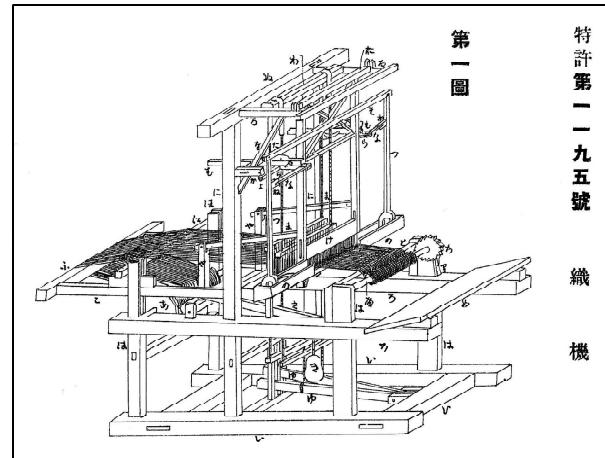
## 障子を開けて見よ、外は広いぞ —国産自動織機の発明に賭けた生涯—

豊田佐吉は、1867年遠江国敷知郡山口村(現、静岡県湖西市)に生まれた。父伊吉は、農業を営むかたわら大工職でもあり名匠であった。佐吉は、寺子屋から小学校に代わる明治初頭の、過渡期の学校教育を経た後、父の大工仕事を手伝いながらその技を習得した。

### ■特許条例、よし此処じゃ、何かお國のためになるものを！

1885年、専売特許令が公布され、その内容に啓発されて佐吉は、発明で身を立てる第一歩を踏み出した。佐吉の郷里は、手織木綿の産地で農家にあったハタゴ(バッタン付高機)に注目し、織機の改良・発明を生涯の仕事にする決意を固めた。佐吉は、1890年23歳の時、ハタゴを改良した「豊田式木製人力織機」を発明、翌1891年に最初の特許「織機」(第1195号)を取得した。

1895年、研究開発の経済的基盤確立のために豊田商店を設立し、経糸を準備するための高効率の



豊田佐吉の最初の特許第1195号(1891年)の図

この発明の復元機はトヨタ産業技術記念館に展示



無停止杼換式豊田自動織機G型(1924)

トヨタ産業技術記念館蔵

(加藤真司)